「第14回『私たちと北方領土』作文コンクール」入賞者一覧

賞　名	題　　名	名　前	市町村名	学 校 名	学年
富山県知事賞	変動の2020から見る北方領土問題	山口　泰成	富山市	富山大学人間発達科学部附属中学校	2年生
北方領土問題対策協会理事長賞	北方領土　平和のモデルにするために	吉田　諒大	富山市	富山市立呉羽中学校	3年生
北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞	北方領土の返還のために	荒谷　唯衣	射水市	射水市立新湊中学校	2年生
富山県教育委員会教育長賞	北方領土返還について	石川　雪那	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
富山県市長会会長賞	一国民として	松川　千恵	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞	「返還」とはどういうことか	木下　朋樹	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入　　選	僕たちにできること	上不　大翔	入善町	入善町立入善西中学校	2年生
入　　選	北方領土の「過去」と「現在」	本島　茉子	黒部市	黒部市立清明中学校	3年生
入　　選	両国の人にとって最も良い方法とは	北崎　結大	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入　　選	北方領土返還に向けて	本堂　春来	黒部市	黒部市立明峰中学校	3年生
入　　選	富山県と北方領土	岡田理紗子	富山市	富山大学人間発達科学部附属中学校	2年生
入　　選	今、僕たちにできることとは	金山　智一	富山市	富山大学人間発達科学部附属中学校	2年生
入　　選	誰もが納得できる北方領土の問題解決へ	北野良太郎	富山市	富山大学人間発達科学部附属中学校	2年生
入　　選	交流深め理解し合おう	立野　修司	富山市	富山大学人間発達科学部附属中学校	2年生

富山県知事賞

変動の二〇二〇から見る北方領土問題

富山大学人間発達科学部附属中学校　二年　山口　泰成

「ロシア領土の割譲に向けた行為や呼びかけは、認めない。」

このニュースをテレビで見た僕は、大きな衝撃を受けました。今年七月、ロシアは憲法改正を成立させたのです。「国境線の画定交渉は含まれていない」とは示しているものの、今後の北方領土の交渉に、影響するのではないだろうか。北方領土が日本へ返還される可能性は、この時点で摘まれてしまったのではないだろうか。僕は、自問自答を繰り返しました。そして、元島民のことを思うと、胸が痛みました。

日本でも、首相交代という大きな変化がありました。九月、安倍政権の継承を掲げる、菅政権が誕生したのです。

また、世界中では、新型コロナウイルスの拡大により、混乱が続いています。

僕は、気付きました。世の中は、動いているのです。北方領土問題を考える上で、大切なこと……。それは、元島民の方々に寄り添い、耳を傾けること。しかし、それだけではいけないと、僕は考えます。過去の北方領土の歴史を正しく理解することは勿論のこと、最近のロシアの動向を見ていく必要性があるのではないでしょうか。そして、政治、経済、文化などもっと幅広い分野から、日露関係が今後どうあるべきかを、国民一人一人が、意見を持つべきだと思います。政治家だけでなく、僕たち若い世代が積極的に行動することで、北方領土の未来が開けることを、僕は信じています。

コロナ禍で、啓発活動に制限がある中、僕は北方領土問題に関するアンケートを作成し、学校内で調査を行いました。すると、署名活動に協力したいという人や、富山県と北方領土が深い関わりがあることを知り、この問題に関心を持ってくれる人もでてきました。

僕には、その仲間たちと、新たに描く夢があります。それは、「小学生にも分かる北方領土問題」と題して、交流授業をすることです。小学生にはまだ早いとか、難しいとか思われるかもしれません。しかし、僕はこれをチャンスと考えます。手作りの紙芝居やカルタ、エリカちゃん人形を使い、クイズ形式で楽しみながら共に学ぶことで、子供

たちにこの問題を身近に感じてもらいたいです。そして、北方領土問題について、家族間で話し合える日が来ることを期待したいです。

また、富山県黒部市には、今年九月「北方領土史料室」が開設されました。この施設は、子供たちに、北方領土の歴史を伝える拠点となります。僕も、何度も足を運んでいます。

「わしらが生きとるうちは、返還は難しいとは思うけれど……。」

元島民の方でした。かすかに声を震わせながらも、僕の両手を取り、何度も手をさすっては力強く握るおじいさん。その手からは、悲しみ、不安、そして北方領土問題への強い思いが感じられました。

僕は、次世代を担う一人として、元島民の方々の思いをしっかりと受け止め、政治にも関心を持ち、世の中の動向を見ながら、今後も自分のできる啓発活動に、力を注いでいきたいです。

北方領土問題対策協会理事長賞

北方領土　平和のモデルにするために

富山市立呉羽中学校　三年　吉田　諒大

「北方領土問題」これは昔から何度も議論され今でも解決への進展が見られない。日本はこの他にも竹島、尖閣諸島などの領土問題を抱えている。なぜこのような領土問題が解決しないのだろうか？今回は北方領土問題を例に考えることにした。ここからは私が考えた北方領土問題が解決に向かわない理由を三つあげる。

一つ目にあげるのはロシアのプライドである。大戦末期のソ連は当時結んでいた不可侵条約を一方的に破棄し、満州国の一部と北方領土を侵攻し、占領したという歴史がある。もし今、ロシアが領土を返還してしまうと、ソ連が日本の領土を不法に占領したことを認め謝罪したと国際社会に思われてしまい、ロシアのメンツが丸つぶれになってしまう恐れがあるからだと私は考えた。

二つ目に思ったのは北方領土周辺の海洋資源の重要性だ。北方領土の周辺には昆布などの水産資源が豊富で漁獲

量が多い。さらに石油や天然ガス、金など天然資源が地下にあるという調査結果が出ている。このことから将来の資源が潤うだけでなく資源が少ない国や発展途上国に輸出できるようになる。言わば「天然資源外交」が展開できるようになるからだと思った。

三つ目は現在、北方領土に住んでいる人々の生活維持の問題だ。現在、北方領土には約一万八千人のロシア人が住んでいてその数は年々増えてきている。ここで領土を返還してしまうと政府の政策も無駄になってしまうし今住んでいる人達は他の場所に移らなければならなくなる。もしこれを強行すると反対運動が起きてロシアの国益が損なわれてしまうしここを渡された日本にとっても不利益につながりかねない。

以上から、ロシアが完全に領土を引き渡すことはほぼないに違いないと思った。ではこのままロシアに北方領土を譲渡してしまってよいのだろうか。私はそうは思わない。もし渡してしまったら安全保障上の問題やロシアによる天然資源の独占が起きてしまい日本の不利益につながってしまうからだ。このようなことをこれまで続けていたから問題が解決できなかったのではないかと思った。

問題を早く解決するために日本側が少し譲り北方領土を日本とロシアの共同統治領にし両国合意のもと政治を行っていけばいいと思った。そうすることで日本もロシアも得をして今までの対立を終わらせて両国の発展の礎とすればよいのではないかと思った。そしてこの解決策を今後の平和のモデルにしていけばいいと思った。

また、私たち日本人は北方領土問題についてロシアだけが悪いではなくロシアと日本が悪いという「喧嘩両成敗」の精神をもってこの言葉を世界に広めていき、この問題と向かい合わなければいけないと思った。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

北方領土の返還のために

射水市立新湊中学校　二年　**荒谷　唯衣**

北方領土という言葉を聞くと、ロシアや北海道という言葉が思い浮かびました。ニュースで取り上げられているのをみたことがあるので、全く知らない言葉ではないけど、人に説明できるほど詳しく知らないなと思いました。なので、北方領土について調べてみました。

北方領土とは、北海道の東北部の海に浮かぶ択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四つの島々からなる地域の総称です。北方領土は日本の領土ですが、ロシアが不法占拠しています。これに対して、日本が返還を求めている領土問題のことを北方領土問題といいます。また、北方領土問題の歴史的な経緯についても調べてみました。日本はロシアより早く、北方四島の存在を知り、多くの日本人がこの地域に渡航するとともに、徐々にこれらの島々の統治を確立しました。一八五五年、日本とロシアとの間で調印された日魯通好条約は北方四島は日本の領土だと確認するものでした。しかし、第二次世界大戦末期、ソ連は対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後に北方四島のすべてを占領しました。当時、四島にはソ連人は一人もおらず、日本人は四島全体で約一万七千人が住んでいましたが、ソ連は一九四六年に四島を一方的に自国領に編入し、一九四八年までにすべての日本人を強制退去させました。それ以降、ロシアによる不法占拠が続いています。

この北方領土問題に対する解決方法を考えてみました。北方領土問題を解決するために啓発事業や署名活動を行い、まわりの人に呼びかけたら良いと思います。私は、この北方領土に関する作文を書くという機会があったから、自分で北方領土について調べました。でも、それがなかったら北方領土について自分から調べることはなかっただろうと思います。それに、そういう人はたくさんいると思います。なので、そういう人に北方領土について知ってもらって、関心を持ってもらうために、呼びかけをしたら良いと思います。

他にも、北方領土問題を解決するために、北方四島との交流をしたら良いと思います。現在、北方四島はロシアの実効支配にあるので、北方四島に行くにはロシアの他の地域への旅行と同様に、ロシア政府からビザの発給を受けて、パスポートを持って、北方領土に入域することになります。しかし、このような方法で北方領土に入域することは、北方領土をロシアの領土だと認めたようになるので日本の政府は、日本国民に対し、北方領土問題解決までの間、北方領土への入域を行わないよう要請しています。なので、国民は北方領土に行きにくいというのが現状です。だけど、交流をする際には、特別にビザなしで北方四島に入ることができます。お互いの国が友好的であるためにも交流は必要だと思います。私がここに書いたことは、もうすでに行われています。でも、すでに行われていることでも続けることで、解決に向かっていくと思います。なの

で、いままで以上にこれらの活動に力を入れて、がんばってほしいです。

私は、この作文を書くまで北方領土のことはあまりよく知らなかったし、たまにニュースで見かけたときにも、「こんなことがあったんだ」と他人事のように軽くしか考えていませんでした。でも、今、改めて考えてみると、今まで自分が住んでいた地域に急に知らない人が入ってきて、追いだされるというのは、とてもショックで腹立たしいことだと思います。しかも、今までは必要なかったのに自分が育った場所に行くのにビザとパスポートがないと行けないというのは、きっととても残念なことです。私は、今後、故郷の島を追われた方たちが島に戻って、そこで暮らせるようになって欲しいと思います。そのために、今、自分にできることをしていきたいです。

富山県教育委員会教育長賞

北方領土返還について

黒部市立清明中学校　三年　石川　雪那

北方領土学習をしていく中で、自然や歴史について知り、その中でも返還運動に興味をもった。戦後約七十年経った今も、まだ北方領土は返還されておらず、ロシアとの交渉もあまり進展がない。そこで、領土問題発生の経緯や北方領土の現状を調べ、返還運動に生かせることはないか考えた。

まずは領土問題発生の経緯を調べた。すると、日本は今までに三つの重要な国際条約を結んでいたことが分かった。一つ目は、一八五五年の日魯通好条約だ。この条約により、初めてロシアとの間に国境線が引かれた。国境線は、当時自然に成立していた択捉島とウルップ島の間であった。この時点で、北方領土は日本の領土になっている。二つ目は、一八七五年の樺太・千島交換条約だ。この条約では、日本はロシアに対し樺太全島の領有権を放棄するかわりに、千島列島を譲り受けた。三つ目は、一九五一

年のサンフランシスコ平和条約だ。この条約では、日本は戦前に領有していた南樺太、千島列島を放棄することが決まった。これらの条約で、千島列島に対する認識の違いがある。日本は、ウルップ島以北を千島列島とし、択捉島は含まないとしている。一方ロシアは、北方領土を含め千島列島としている。この両国の解釈の違いが返還の進展がない原因の一つだと思う。また、領土問題は一九四五年のソ連軍の侵攻によって発生したことが分かった。日ソ中立条約を無視して日本に攻めて来たソ連は、日本のポツダム宣言受諾後も攻撃を続け、今日に至るまで北方領土を不法占拠している。しかし、北方領土は日魯通好条約が結ばれてからずっと日本の領土であり続けている。

次に北方領土の現状を調べた。そこから主に二つの問題があることが分かった。一つは、島の環境問題である。海産物の加工工場から出る汚水や廃棄物が海に垂れ流されていたり、ロシアの使わなくなった船舶が海に沈められたりしているそうだ。陸地には、たくさんのごみや車が不法投棄されているらしい。もう一つは、元島民の高齢化である。現在、元島民の平均年齢は約八十五歳で、北方領土に関することを後世に残せるのかどうかが心配されている。この二つの問題から、島の豊かな自然を守り、より多くの北方領土に関する情報を元島民から若い世代へ伝えなければならないということが分かった。

調べたことから、返還運動に最も生かせそうなのは、両国の千島列島に対する解釈の違いをなくすことだと考えた。これをなくすことで、領土の分け目がはっきり分かると思うからだ。そのために、返還の声を国内だけでなくロシア側にもっと伝える必要があると思う。これまでの返還運動では、講演会や弁論大会、署名活動等を主な活動としている。近年ではラジオやテレビでも取り上げられるようになり国内での関心も高まっていると思う。しかし、これらの活動はロシアに影響をもたらしているのだろうか。これからの返還運動では、これまでやってきた活動に加え、環境保全の強化、千島列島に対する認識について、そして、日本人の思いがどうやったらロシアに伝わるのかを考えるべきだと思う。

これだけ長い間返還されてこなかったものを返してもらうことやロシアへの思いを伝えることは、とても難しいことであり、まだ時間がかかると思う。だからこそ、若い世代が元島民の思いを受け継ぎ、返還に向けて行動していかなければならない。そして、決して返還の声をなくしてはいけない。

富山県市長会会長賞

一国民として

黒部市立明峰中学校　三年　**松川　千恵**

一致団結。これが、北方領土を返還するために、今、日本に必要なことであると私は思う。私はある日、国民全員で協力すべきだと気付かせてくれた曲に出会った。

その曲は、「蛍の光」。誰もが知っている歌で、卒業式などで歌われているため、別れの曲としてのイメージが強いと思う。そんなこの曲は、二番までしか歌われていないことがほとんどだ。本来は四番まであり、内容は、千島列島から沖縄まで団結して国を守っていこうというものだった。今は歌われなくなったものの、この「団結して国を守る」という言葉が私の心に深く刺さった。そして、一国民として、北方領土問題に向き合うようになった。

一九四五年（昭和二十年）八月二十八日、ソ連軍が択捉島留別村に上陸以来、北方四島の島々は全てソ連軍によって占領されてしまった。私有財産は取り上げられ、自分の土地も畑も使用できず、家畜の馬や牛も奪われ、個人所有の船もすべて、戦勝国の名において国有化され、あるいはロシア人の手に渡ってしまった。それまでは、昆布を中心として、まぐろやおひょう、カレイなどの豊富な水産資源に恵まれていた。生活は苦しいものだったが、工夫しながら楽しく生きていた。しかし、そんな思い出のある地を突然、ロシアに占領されて、普段の生活ができなくなり、島を出ていくことになったのだ。

私は怒りや悲しみから北方領土問題を解決するために、多くの参加者が集会を開いている映像を見た。参加者全員の胸には、「島を返せ」と書かれたたすきにはちまき、そして旗を持っていた。また、「返せ！返せ！」と訴えていた。その姿には大きな熱意を感じた。ほかにも、署名運動や、私たち学生に向けた講演会、史料室を造ったりなどさまざまだ。みなさんも、北方領土を返還するために、一生懸命活動している人がいることを知るべきだと思う。しかし、解決する兆しが見えないのは、どうしてだろうか。

元島民による講演会で質問してみることにした。すると、北方領土では「たくさんの昆布等が豊富に取れるため、日本は裕福になる」と言っておられた。たしかにそうだと思う。今日の島々は、品質の高い昆布を手に入れていることだろう。実は、北方領土返還問題を解決させると、

返還運動を行っている方々にはもちろん、国民全員にも大きな利益が得られるのである。

そんな中、元島民の方々の平均年齢は八十五歳である。そして、返還運動をしている人々の年齢も高齢化が進んでいるといえる。経済活動も事業を進める中に返還運動が少しでもついてこないといけないのだが、なかなか難しい。解決に一歩でも踏み込むため、行動することが必要である。たぶん、国民全員が、特別な思いはあまりなくても領土問題を解決したいと思う人がほとんどだと思う。思いがあっても、行動しないと、一ミリメートルも前に進まない。しかし小さな一ミリメートルの活動でも、国民全員が協力すると、約一億三千ミリメートルの大きな活動になる。このように、なにごとにも一国民としての自覚や責任をもって行動することが大切なのだ。また、住みたくても、住めない人がいることを知り、毎日を楽しく過ごせている私達がどれだけ幸せかを理解する必要があると思う。私はいつか、北方領土が返還されて、より楽しい日々を必ず送れることを信じている。それまでは、周りの人に北方領土についての関心を深める活動など、簡単なことから始めていきたい。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

「返還」とはどういうことか

黒部市立清明中学校　三年　**木下　朋樹**

三年生になるまでに「北方領土」という言葉を聞いたことはあっても、それがどのようなものなのかまでは知りませんでした。僕のように、領土問題に無関心、または、言葉のおおまかな意味だけを知っていて、行動におこそうとしない人たちも多いのではないでしょうか。

北方領土問題は、一九四五年八月、ソ連が日本との日ソ中立条約を破り、択捉島、国後島、歯舞群島、色丹島の島々を現在まで不法に占拠し続けている問題のことです。日本は江戸時代ごろから北方領土を日本のものとして、探検や測量を行ってきました。また、戦争や条約などにより様々な領地拡大、縮小を行ってきましたが、一九五一年のサンフランシスコ平和条約では、樺太と千島列島を放棄した中に北方領土はふくまれていないようです。

現在、日本は、ロシアとの交渉を続けていますが、なかなか実を結びません。北方領土に近い北海道根室市にある

根室高校では、北方領土根室研究会というものがあり、北海道雪まつりや根室さんままつりで返還への署名運動を行っています。しかし、近年の十代、二十代に見られる傾向として「無関心」という傾向があり、理由は「活動をしていても効果がないように感じるから」とのことです。

簡単に「返還」と言いますが、北方領土にはロシア人の人たちが生活しています。僕は日本にとっての「返還」は北方領土に住む人々にとって「占拠」を意味しているのではないかと考えています。例えば、今住んでいる家や地域が他国固有の領土であるとして、返還されれば、どうでしょうか。昨日まで住んでいた家や地域は他の国のものとなり、普通で幸せな生活は一気に壊れてしまいます。周りの環境も変わり、もしかすると、もう一生友達に会えなくなるかもしれません。「返還」にはこのような未来になってしまう人もいるかもしれません。

しかし、根室高校の北方領土根室研究会の顧問の先生は「まずは、仲良くなることが大切」とおっしゃっていました。この言葉を聞いてまさにそのとおりだと思いました。お互いの主張を聞くことが円満に解決するために一番良い方法だと思いました。

私たちが生まれるずっと前からあった北方領土問題は、今も、そしてこれからも意識していきたい大切なことです。また、これからの私たちは、ロシア人の立場にもなって返還の難しさを理解すべきだと思います。もし、一方的に日本のものとすると、再び七十年以上前のソ連と同じことを繰り返してしまうことになります。初めに言ったように、北方領土問題のことを多少でもよいので聞いたことがある人たちは、無関心や行動をおこさない状態を続けるのではなく、周りの人たちと、考えを共有し、一人一人が解決に向けて真剣になっていってほしいと思います。

身近でないようで身近な北方領土問題を伝えていくのは今の若者である私たちの役目ではないでしょうか。決して、他人事ではないこの問題が解決するころには、日本の人やロシアの人も互いが納得した状態で返還されるように、今の私たちにできることを一つ一つ積み重ねて達成していけるようにがんばっていこうと思いました。総合的な学習の時間で学習したこれらのことを意識して普段の生活を過ごしていきたいです。

入選

僕たちにできること

入善町立入善西中学校　二年　上不　大翔

僕が北方領土に初めて興味をもったのは、北方領土の講習会で歯舞群島の元島民の方々の話を聞いた時でした。その講習会では、元島民の方々から歯舞群島に住んでいた理由や当時の生活の様子を聞くことができました。富山県からもたくさんの人々が北方領土に移住したり、出かせぎに行ったりして生活しており、富山県と北方領土とのつながりや関わりはとても深いものです。しかし、現在北方領土は日本人が住んだり、自由に行き来できない土地となって約七十年も経過しています。僕たちは、深いつながりのある北方領土について関心を持ち、北方領土問題について深く考えていく必要があると感じました。

僕は、どうすれば北方領土問題について平和的に解決できるか考えてみることにしました。しかし、北方領土について知識が浅い僕には、良い案が思い浮かびませんでした。そこで、北方領土について詳しく知るために、北方領土について調べてみることにしました。

北方領土とは北方四島のことを指し、択捉島、国後島、色丹島、そして歯舞群島からなる領土で、森林資源や海産物などの資源にも富んでいます。明治時代から日本人は北方領土への出稼ぎや移住を行い、富山県からも多くの人々が移住を行っています。富山県からの移住者は北海道に次ぎ二番目に多く、その中でも黒部市、入善町からの移住者がほとんどです。富山県人はまじめで忍耐強く「越中衆」と呼ばれ大きな信頼を得ており、コンブ漁などを通して北方領土の開拓や発展に大きな影響を与えてきました。富山県と北方領土とのかかわりはとても深いものであったといえます。一八五五年の日露通好条約により日本の領土と定められました。しかし、第二次世界大戦後にロシアに不法占拠され、日本人は強制退去させられてしまいました。その後日本は何度もロシアに対して返還要求を行っていますが、七十年以上たった今でも返還はされていません。

現在北方領土には多くのロシア人が生活し、ロシア側も自国の領土だと主張しているため北方領土の返還は難しい問題です。しかし、日本側も自国の領土だと主張しているため、平和的に解決していかなければいけません。

北方領土問題への取り組みとして相互理解と友好を深め

るため、「ビザなし交流」が行われています。ビザなし交流では、日本人の元島民や現島民のロシア人との相互訪問が行われており、北方領土問題にわずかながらも貢献しています。また、二月及び八月は、「北方領土返還運動全国強調月間」として、講演会、パネル展など、全国各地で多彩な行事が行われています。返還実現のために行われてきた署名活動には、すでに九千万人以上の署名が寄せられています。

このように、様々な活動を行っているにも関わらず、北方領土の返還が実現されていません。七十年以上たった今では、北方領土の生活について知っている人は減ってきています。また、僕たちの北方領土に対する意識や関心も薄れてきているように感じます。この問題を風化させず、前向きな解決につなげるために、僕たち一人一人がこの問題への関心と理解を深め、返還に向けた強い意志を共有していくことが大切です。

入選

北方領土の「過去」と「現在」

黒部市立清明中学校　三年　**本島　茉子**

私は、北方領土の過去と現在について興味をもち、調べました。

まずは、北方領土の過去についてです。私は、日本とロシアの国境の移り変わりを調べました。日本とロシアは過去に三度、国境が大きく移り変わっていました。一度目は、一八五五年に結ばれた日露和親条約です。この条約では択捉島から南が日本領、ウルップ島から北がロシア領とされました。二度目は、一八七五年に結ばれた樺太・千島交換条約です。この条約では千島列島の全ての島々が日本領、樺太がロシア領とされました。三度目は、一九〇五年に結ばれたポーツマス条約です。日露戦争で勝利した日本はこの条約で、樺太の北緯五〇度より南の部分をゆずりうけます。ここまでで、北方領土はロシアのものとなることはなく、日本の領土として日本人がずっと住み続けていました。状況が大きく変わったのは、終戦後のことで

す。一九四五年八月下旬、ソ連軍は北方領土にアメリカ軍がいないことを知り、北方領土を含む千島列島を占領しました。当時、北方領土には約一万七千人の日本人が住んでいましたが、強制的に引き揚げさせられました。一九五一年、日本は第二次世界大戦の講和条約である、サンフランシスコ平和条約を四十八か国と結びました。しかし、それにソ連は参加せず、その後も日本とロシアの間に講和条約が結ばれることはなく、北方領土問題は解決できていません。

次は、北方領土の現在についてです。現在、北方領土には約一万八千人のロシア人が住んでいます。国後島を取材した人の話によると、現在、国後島はインフラ整備が強化され、北方領土開発のためにロシア政府が大規模な予算を投入しているそうです。また、ロシア政府の支援策で、年々人口が増えていて、待機児童までいるそうです。ロシア政府の支援策は、北方領土をロシアの他の地域と比べて所得を高くする、北方領土に十五年間住めば、年金の開始年齢が五歳早まるなどです。このようにして北方領土の「ロシア化」が進み、日本の北方領土の返還からますます遠ざかっています。

最後に、北方領土の元島民の方に伺った話の中で私が心に残った三つの話についてです。一つ目は、現在の北方領土の様子についての話です。昔はコンブ漁が盛んだった北方領土ですが、現在、北方領土のコンブは誰にもとられず、腐っているそうです。昔とは変わり果てた北方領土の姿を目にしたとき、元島民の方々は涙したそうです。二つ目は、北方領土問題についてです。元島民の方々はロシアの人々と会うとき、昔のように直接北方領土を返せと言うことはなくなったそうです。今では、ロシアの人と対立せず日本人とロシア人がお互いに理解を深め、仲良くなることが重視されているそうです。三つ目は、北方領土返還に向けて行っていることについてです。現在、領土返還に向けて行っていることは、署名活動や北方領土の写真展をするなどです。写真展などをすることは、私たちに北方領土のことをよく知ってもらい領土問題に関心をもってもらう目的があるそうです。

私は、北方領土学習を通して北方領土についての理解を深め、領土問題に関心をもてるようになりました。北方領土がロシアの手に渡ってからもう少しで八十年となり、北方領土のことをよく知っている元島民の方々も数少なくなりました。私は今回の学習で元島民の方々から聞いた貴重な話を家族に教えてあげたいです。私たちが北方領土の知

識を身に付けること、日本人とロシア人が互いを理解することが領土問題解決へつながるはずです。私は北方領土が、日本人が自由に行き来できる、日本人にとって身近な存在である場所になってほしいと思いました。

入選

両国の人にとって最も良い方法とは

黒部市立明峰中学校　三年　**北崎　結大**

北方領土問題。それこそ僕がずっと小さい時から今に至るまで、よく聞いている問題である。小学校へ行く途中の市役所では、ときどき返還すべきという表示が流れていたし、今は解体されている旧市役所にも、返還を求める言葉が書いてあった。学校でも、北方領土の授業はよく受けたものだから、結果的に地球温暖化、少子高齢化と同じくらいよく聞き、よく考える問題となったのだ。

北方領土の返還は、元島民の方々はもちろん、日本の多くの人々の望みである。元島民の方々の話を聞く出前講座に参加したときも、特にそれを感じた。しかし、もう七十数年続いている問題なのだから、解決が難しいのは明らかである。

北海道から始まった返還運動は全国に広がり、国と国の交渉も何度も行われている。ビザなし交流も行われ、元島民とロシア人との仲も少しずつ深まっているようだが、進んでいるかといえばどうなのだろう。

返還のために条約や宣言が出されたかと思えば、軍事演習でけん制し、またその繰り返し。今は、ロシアの憲法が改正され、「ロシアの領土の割譲禁止」が書かれている。またふり出しに戻った、とインターネットに書かれてしまっているのだ。

そして、今の北方領土。歯舞群島は無人島で、かつての建物はなく、砂地状態。国後島や択捉島も、かつての建物は壊され、ロシア風の建物や病院、学校がある。仮に返還が成立しても、今いるロシアの人達はどうなるのか。故郷をうばわれた日本人が、今度は故郷をうばう側になってしまう、とも言える。

時代が進むにつれて、考えもたくさん出てきた。二島だけ返してしまおうという論、もちろん全部返すべきという論、面積を半分ずつという論、そもそもあきらめればいいという論、様々である。昔なら全て返還すべきだという考

えで当たり前だし、かつての僕もそうだと思っていた。

しかし、これらの論はどれを行おうとしても、反対する人、悲しむ人、喜ぶ人に分かれてしまう。日本人が当たり前のように求めてきた全面返還も、七十数年の間にロシア人の故郷となった関係で、ロシアの人々に悲しみを与えてしまうことだろう。

その中で、共同で住むという論が強まっているように感じた。今も、様々な国の人が様々な別の国で生活するのは、当たり前のことになっている。それと同じように、元島民を含む日本人と、北方領土が故郷の人を含むロシア人の両方が住める場所になれば、両国にとって最善の選択であるように感じる。今の僕の考えもこれだし、今北方領土に住むロシア人の中にも、この考えはある。もちろん元島民の方々にも。「返せ、返せ」「自分の領土だ、自分の領土だ」と言っていては何も進まない。かつての島民の方々の思いとは違うところも多いであろうが、最も早く、最も多くの人に喜ばれるはずだ。

論が次々に生まれ、もはや返還が最も良い道とも言えない今の時代。ここは互いに譲り合い、両国の人々が両方とも住めるようになる、共同で住む論が、問題解決の決め手になるのではないか。そう僕は考える。

入選

北方領土返還に向けて

黒部市立明峰中学校　三年　**本堂　春来**

みなさんは「北方領土」と聞いてどう思いますか。北方領土なんて自分には関係ない、僕も初めて北方領土のことを知ったとき、そんな気持ちでいました。しかし、北方領土は先人たちの努力で開拓された領土であり、日本にとってとても大切な領土なのです。

北海道本島から北東に、一番近い歯舞群島の貝殻島は三・七キロ、一番遠い択捉島は百十キロ離れたところに北方領土は位置しています。一八五五年に結ばれた日魯通好条約で択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島が日本の領土と認められて以降、日本からたくさんの人たちが移住し、北方領土を開拓していきました。北方領土周辺の海は海産物が豊富にあり、中でもコンブ漁がさかんに行われました。島の人々の生活は不便なことや困難なことも多く、生活環境も厳しい中、先人たちは一生懸命開拓し、成功していったそうです。しかし、第二次世界大戦末期の一九四五年、

状況は一変します。日本の敗戦が決定的になった八月八日、ソ連の外務大臣が日本に対して宣戦布告したのです。ソ連軍は、終戦後の八月十八日より千島列島への攻撃を開始し、九月五日までに北方四島を占領しました。北方領土に住んでいた人たちは、身の危険と島の将来に不安を感じ、脱出、引き揚げを余儀なくされたのです。こうして、日本人が努力し、開拓してきた北方領土はあっという間にロシアの領土になり、今もその状態が続いているのです。

北方領土から脱出、引き揚げてきた人たちはどんなことを考えたでしょう。自分たちの故郷が奪われたと思ったら、自分たちが開拓した島に何の関わりもないロシア人が住んでいると思ったら、どれほどつらい気持ちになったでしょう。

今、日本では、北方領土を返還しようと、返還運動が行われています。終戦からおよそ七十年、長きに渡り、日本はロシアとの外交交渉で北方領土の返還を要求していますが、なかなか実現することができません。それでも諦めず、粘り強く交渉を続けることが北方領土の返還につながると思います。一九七二年の沖縄返還に貢献した、元内閣総理大臣の佐藤栄作さんはこのようなことを述べました。「沖縄が復帰しない限り、戦争は終わらない」僕は、この言葉は北方領土問題にも同じことが言えると思いました。北方領土問題の現状を理解し、国民全員が佐藤栄作さんのような返還に対する強い思いをもつことが大切だと思います。

近年は、返還運動の中核を担う元居住者の高齢化が進んでいるため、返還運動を続けるためには、僕たち若い世代の参加が必要です。これから一人でも多くの人が北方領土問題に関心をもち、さらに北方領土返還運動が活発になってほしいと思います。そして、北方領土がまた日本の領土に戻ることを願っています。

入選

富山県と北方領土

富山大学人間発達科学部附属中学校　二年　**岡田理紗子**

北方領土問題とは、北海道根室半島の沖合にあり、現在ロシア連邦が実効支配している択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の島々、すなわち北方領土に対して日本が返還を求めている領土問題のことです。

第二次世界大戦で日本がアメリカに原子爆弾を落とされ、ポツダム宣言を受け入れました。その事があったあと、ソ連が北方領土を侵攻し、日本人たちを追い出して自分たちの国の領土にしました。ソ連からロシア連邦にかわった今でもまた占領されています。そのため日本は北方領土を返還してもらうために話し合いなどをして交渉を求めているところです。

私たち富山県民の祖先は、「越中衆」として、持ち前の忍耐強さと勤勉さで歯舞群島などの漁場開拓に取り組み活躍したそうです。そのことから、北方四島からの引き揚げ者数は、北海道に次いで二番目に多いと言われています。

中でも黒部市においては、明治中頃から出稼ぎ漁で北方領土を目指し、家族ぐるみで、主に歯舞群島に移住した人が多く、渡島した県内出身者の約六割にあたるそうです。だから、根室、歯舞群島のコンブ漁は、私たち祖先によって開拓され、発展したといっても過言ではないと思います。それなのに、今なお占拠され、島を追い出され、自分の故郷なのに自由に行き来することができない人たちの気持ちを思うととても切ない気持ちになります。

北方領土の面積の総計は、富山県の面積の約一・二倍の広さです。国後島、択捉島は、いずれも沖縄本島より大きく、特に択捉島は日本でいちばん大きい島ということになります。富山県の約一・二倍の面積がロシアに占拠されているのです。

富山県民の祖先の人たちが、厳しい自然環境の中で苦労して開拓し、生活を営んでいた北方領土の返還は、県民の悲願であると思います。

今年のお盆に私は、お墓参りをしました。新しくきれいに修復されたお墓参りをする事はとても気持ちのよいものでした。こんなふつうのお墓参りやお墓の修復なども北方領土問題があるとできないんだなと思いました。航空機によるお墓参りでなく、ふつうのお墓参りができる日がくる事を願っています。

北方領土は、旧ソ連による占領後七十年余り経過した今でもロシアの占拠下に置かれています。このような中、令和元年九月に日本の安倍総理とロシアのプーチン大統領との間で日露首脳会談が行われました。両首脳は未来志向で作業を進めることを確認し、双方が受け入れられる解決策を見つけるための共同作業を精力的に進め、交渉を一歩一歩着実に前進させていく考えを示しましたが、具体的な進展は見られませんでした。今後も日本とロシアの進展に期待して、北方領土問題が少しでも前進することを願います。

北方領土問題は、元島民だけでの問題ではなく、日本の主権に関わる大切な問題です。そのためには、一人でも多くの人が領土問題を正しく認識することが大切だと思います。元島民の方々などの高齢化も進むなか、私もこの問題に関する正しい理解と関心を持って自分に何かできるか、できることをやっていこうと思います。中学生である私にとって、できることは少ないかもしれませんが、私は北方領土について考え続けたいと思います。早く日本とロシアの両国間に新しい扉が開かれることを願います。

入選

今、僕たちにできることとは

富山大学人間発達科学部附属中学校　二年　**金山　智一**

「ロシアはひどい国だ。」社会で北方領土について学習した時にそう思った。北方領土とは、国後島・択捉島・色丹島・歯舞群島から成る島々である。教科書には、北方領土は、「日本固有の領土」で、「現在までロシアが不法に占拠した状態となっている」との記述があり、その時僕はそう感じた。そこで、北方領土についてさらに知りたいと思い、自分なりに調べてみた。

すると、日本の領土であるはずの北方領土にロシア人が住んでいることや、日本の先人たちが漁場として整えてきた海で漁をする日本人がロシアに捕まり、多額の罰金を課せられているという事実を知った。そして、ますますロシアがひどい国だと感じた。

しかし、そんな僕の考えが一変したのは、ある日の友達との会話だった。僕は友達に、北方領土を不法に占拠しているロシアはひどい国だと思っていることや、ロシアは日本に北方領土を返還すべきだとの考えを話した。するとその友達は困った顔をしてこう答えた。

「確かにその通りだね。でも、今日本が一方的に北方領土を奪ったら、今そこに住んでいるロシアの人たちがかわいそうだよ。」

僕はこの言葉を聞いてはっとした。今までの僕は、北方領土は日本のものなのだからロシアが勝手に占領するのはおかしいという主観的な考えしか持っていなかった。しかしこの言葉を聞き、北方領土問題は一方的に日本側の主張を推すのではなく、ロシアの立場にも立って考えなければならない問題だと分かった。その上で、この問題は武力を

使わずに平和的に解決しなければいけないものなのだと実感した。

以前、ニュースである国会議員が「北方領土は武力で奪い返せ」と公言したと報道していた。当時は「そうするしか解決策はないのだろうな」とその議員の発言に少し納得していた。しかし、今はきっぱりと「それは絶対に違う」と言える。

なぜなら、北方領土問題は話し合いで必ず解決できる問題だと信じているからだ。そのためにも、僕はより多くの人が北方領土について知る必要があると思う。北方領土に対する日本人の意識が低くなれば、北方領土問題は解決できなくなってしまう。そのためにも、より多くの日本国民がその問題について知識を深め、真剣に考えていかなければならないのである。なので、その役目を全て国などの行政機関に押しつけるのではなく、僕たちにもできるようなことを積極的にしていかなければならないと考える。例えば「友達との会話で北方領土の話をする」「北方領土に関する新聞記事を読んだり、ニュースを見たりして理解を深める」など、僕たちにもできるようなことはたくさんあるはずだ。そして、身近なところから、北方領土の関心を高めていき、みんなでそれについて考える必要があると思う。日本、ロシア双方の立場に立ってこの問題を考えるのはとても難しいことだが、平和的解決の実現に向けて、この問題を皆で真剣に考えなければならない。

入選

誰もが納得できる北方領土の問題解決へ

富山大学人間発達科学部附属中学校　二年　**北野良太郎**

北方領土問題は、北海道の北東沖に位置する択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島の島々を実効支配しているロシア連邦に対して日本がこの島々の返還を求めている領土問題である。この問題のポイントについて考えてみたい。

外務省のホームページには、北方領土はこれまでに一度も外国の領土になったことのない日本の領土であると書かれている。第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日、ソ連は日ソ中立条約に違反して対日本戦に参戦し、北方領土を占領した。当時、四島にはソ連の人は一人も住んでいなかった。これに対して日本人は四島全体で約一万七千人が住んでいたが、一九四八年までに全員が強制退去させられ

た。その後、ソ連がロシア連邦になった今でも不法に占拠される状態が続いている。

日本の政府は、北方領土問題を解決してロシアとの平和条約を締結するという基本方針をもっている。これに対し、ロシア政府は、一九四五年二月のヤルタ協定によって北方四島はロシアの領土の一部になったと主張している。また、一九五六年の日ソ共同宣言で、①平和条約締結交渉の継続、②平和条約締結後に歯舞・色丹が日本に引き渡されることが決められており、それ以上の領土問題は存在しないと主張している。

近年ロシア政府は「領土問題は存在しない」という立場をとっている。実際、二〇一八年のロシア国内の世論調査では、「南クリル（北方領土）はロシアの領土である」という意見が多く見られた。

二〇一四年には、択捉島にロシアの空港が開設され、二〇一六年には、択捉島・国後島に対艦ミサイルが設置された。二〇一九年には、サハリンと択捉島・国後島・色丹島を結ぶ高速インターネット網を中国企業のファーウェイが整備した。ファーウェイに関しては、アメリカ合衆国が安全保障上の理由から取引を禁止している。このように、北方領土問題は複雑化し、日本の思うような解決が遠くなっているように見える。

しかし、結局のところ元島民を含む両国民が納得できる解決方法を探ることが最大のポイントだと思う。そのために考えられるのは、日本の人々が北方領土についてよく知ることであり、小説・映画・アニメ・ＳＮＳ等を通して一般の人々に北方領土への関心を持ってもらうことである。その際、領土問題を前面に出すのではなく、この地域の情報が自由に発信されれば良いと思う。次に、元島民を含む人々による意見交換も大切だと思う。その際、普段からこの問題について考えているのではない人々に歴史を学んでもらい、四島の将来について語り合ってもらうことも考えられる。

入選

交流深め理解し合おう

富山大学人間発達科学部附属中学校　二年　**立野　修司**

日本国固有の領土であるにもかかわらず、ロシア連邦がなかなか返還してくれない北方領土。交渉は進まず、実現

が難しい状態が続いています。

この問題を早期に解決したいからといって、誰も武力での返還を望んでいるわけではありません。日本は平和で、安全な解決を望んでいるのです。

「平和で安全な解決」をするにはどうすればよいのか。僕は、日本人とロシア人双方が、互いの北方領土に対する思いを理解し合うことが大事だと思います。

そこで、大切にしたいのが「ビザなし交流」です。ビザなし交流とは、北方領土問題が解決するまでの間、日本国民が北方四島を訪れ北方四島に住むロシア人が日本を訪問することで、相互理解や友好を深めることを目的として交流することです。

ビザなし交流は一九九二年から始まり、二〇一五年までの二十四年間で、日本人ロシア人合計二万一千人以上が相互訪問しています。このおかげで両国の人々はこれまでの歴史的経緯や、互いが持つ愛着について共有することができてきたのではないでしょうか。

僕はビザなし交流のように友好関係を深める行為が、北方領土問題の早期解決につながると考えます。相手国側の意見や思いを理解することで、譲り合いの精神が生まれ、問題がある程度プラスの方向に進むのではないだろうか。

仮に北方領土問題が解決した後の世界でも、安全で安定した国交を保つことができると思うのです。

平和的解決でこの問題を終わらせられるように、国民一人一人がこの問題に関心をもつことが大切です。

特に、富山県は、県内から北方領土へ開拓に行った人が北海道民に次いで全国で二番目に多い県です。恥ずかしながら、僕はこのことを最近知りました。このことから、北方領土とつながりが深い富山県民でも、北方領土について詳しく知っている人はまだ少ないのではないかと考えました。

私たちは、領土問題について政府に任せがちになるのですが、県民として身近な問題と捉え、声を上げていく必要があると感じるようになりました。

加えて、北方領土の歴史的経緯などについての教育も富山県はもっと進めていくべきだと思うのです。

現在、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、ビザなし交流事業も今年すべての交流事業が中止となっています。

終息後に、またこの事業が早期に再開され、領土問題を深く考える機運が高まることを願っています。僕もこの作文をきっかけに、改めて領土問題について考えていきたいと感じています。